



キム・ベギョン、キム・チャンス、パク・サモン、
 パク・セフン、パク・ジナン、ヨム・ボッキュ
 『帝国日本と植民地朝鮮の近代都市形成—1920～30年代東京・大阪・
 京城・仁川の都市計画論と記念空間を中心に』（シムサン出版社、2013）

김백영, 김창수, 박삼헌, 박세훈, 박진한, 엄복규 『제국 일본과 식민지 조선의 근대도시 형성—1920～30년대 도쿄 오사카 경성 인천의 도시계획론과 기념 공간을 중심으로』
 (심산출판사, 2013)

ここ10年の間、韓国における植民地研究は多方面で重要な成果を挙げてきた。しかし、同時にいくつかの問題点も明らかとなっている。それは「収奪論」と「近代化論」間の硬直した二項対立や、政治・経済史と社会・文化史的研究の成果を取りまとめる多学際的なアプローチの不足、一国史の視野の域を出ない韓国と日本の近代史研究の風土的限界等に集約される。

そのような状況下で、著者達は膠着状態を乗り越え、より生産的な学問討論と理論の定立を目指し、韓国学界の植民地研究の中で「植民地近代都市に関する比較研究」という新たなテーマを設定し、分析している。

本書が扱う、植民地期の近代都市と都市空間の近代性に対する社会的関心の高まりは事実であるが、これまでの韓国において「帝国日本の近代都市」に対する研究は殆ど行われていなかった。つまり、韓国の近代都市について議論する上で、植民地朝鮮と帝国日本の都市間にどのような同質性、もしくは質的相違が存在したかという明確な考察が行われず、単純な収奪と開発の二分法的な結論にとどまっているのが現状である。

それ故、本書では植民地期の「日本国内」で実行された近代都市計画論と開発事業を調べ、これらが一定の時間を経て朝鮮に流入、変容される過程に着目する。さらに、帝国日本と植民地朝鮮の関係を都市間ネットワークの観点から把握し、植民地の近代化問題において、その後形成された「現代国家との時間的連続性」よりも、過去に実在した「植民地帝国との空間的連続性」を優先してアプローチする事を提案している。

第1部「都市計画論の理想と都市開発事業の実際」では、1920～30年代の東京・大阪・京城・仁川の各都市で展開された、都市計画論の理想と開発事業の過程に重点を置いた四つの研究について扱っている。第1章では、1923年の関東大震災以降、近代都市計画に関する議論に火をつけた、後藤新平の「帝都復興論」について分析している。これは、第一次世界大戦以降、列強として成長した帝国日本の地位に相応する首都のインフラ構築について述べたものであった。第2章では、帝都東京を凌ぐ程の経済的繁栄を遂げていた大阪が、国家の強力な支援により復興事業を推進した帝都東京と異なり、市政・市民による大阪独自の開発事業を展開した点を分析している。

一方、日本の都市計画事業に影響を受け、朝鮮でも1920年代以降、都市計画に関する論議が活発的に展開された。帝国日本は植民地にも「日本式都市」を建設していくが、第3章と第4章では、京城と

仁川で行われた「植民地都市計画」に着目している。伝統的な都市空間を解体し、植民統治が容易な空間構造の創出に向け、朝鮮の重要都市の改造に着手する日本の政略が示され、京城においては、深刻な住宅問題と貧困問題が顧慮されなかった点や、日本の関心の低さや財政的な問題で、結局未完成のまま終戦を迎えた点を指摘し、仁川の場合は、満州事変と日中戦争以降その地理的な重要性から、大陸兵站基地として本格的に開発された歴史を分析している。

第2部「帝国と植民の記念空間」の第5章及び第6章では、東京と大阪の近代的な都市基盤を整備する過程で、日本帝国の国体を表す空間である明治神宮の建立事業と、1928年に大阪市長の主導で行われた大阪城再建事業について分析している。

そして第7章と第8章は、植民地都市に共通して存在し、重要な景観的特徴といえる「神社」が、都市空間と植民地国民に与えた変化を分析している。戦時中朝鮮内にも多くの神社が建立され、その存在が植民地都市における日本人社会の精神的統合の核となり、支配の象徴として位置付けられたのは周知の事実であるが、特に第7章では、朝鮮総督府舎と共に、植民地時代の京城を象徴する建築物として南山に建てられた、朝鮮初の神宮「朝鮮神宮」について論考している。

朝鮮神宮は、天皇制帝国主義の「同化主義イデオロギー」を具現化する目的で建てられ、帝国日本はその実現のために「空間の同化」と「住民の同化」という二つの作業を必要としたが、特に後者は神道信仰を持つ日本人と持たない朝鮮人の差を埋め、どちらも天皇制帝国の「忠良な臣民」に仕立てる目的であった。本章では、朝鮮神宮がどのように作られ、植民地都市・京城の都市空間にいかなる変化をもたらしたのか。そして、1930年代に皇民化政策が本格化する過程での朝鮮神宮の活用と、その社会的効果を緻密に分析しており、続く第8章の「仁川大神宮の空間変容と在仁川日本人」内でも、仁川大神宮を題材に植民地神社の建立と空間技能の変容に対して考察している。仁川大神宮は、地域社会の主導権を掌握しようとした日本の経済人によって建立されたが、その後日本の侵略戦争の勝利を記念する地となり、皇民化政策を教育し学生達を動員する現場として利用されていた点を指摘している。

このように植民地都市は「支配」の拠点であり「開発」の集積体であると同時に「収奪」と「抑圧」の装置として機能した。これらの都市から見られる大きな特徴は、日本型の植民地都市の建設に際し、「一時移住型」ではなく、「完全領土化」戦略が駆使されている点である。

本書では、「植民地都市」を分析する上で苦勞と努力を惜しまなかった著者達の痕跡が所々に染み込んでいる一方、「都市」という多面的な事象に対して、歴史・政治・社会・文化・地理・建築等、学際間の境界を行きかう挑戦的な知的横断の試みであるが故、未熟さと弱点をさらけ出している部分も見受けられる。

しかし本書の最大の長所は、社会学的な想像力と歴史学的な洞察力を極大化する事で、京城 - 仁川 - 東京 - 大阪の都市史の変遷を幅広い脈絡みやくらくの中で理論化しようと試みた点である。

「開発」と「収奪」の二分法や、一国史の当然視された領土的境界を乗り越え、植民地時代に対する新たな理論的解法を模索し、再構成する事で書き直された日帝時代の植民地社会史。それは既存の固定観念と化した歴史談論とは全く異なる、今までタブー視されてきた多少見慣れなくて居心地の悪い解釈的な風景の中に、私達の「植民地近代」を呼び寄せる。

今後、本書を含めた著者の生産的な提言が、情緒的な拒否感や学際的境界を克服し、国内外で積極的な知的交換と社会的反響を喚起して、植民地研究のさらなる活性化に繋がる事を大いに期待したい。



キムヒョスン
金孝淳
カンド

『間島特設隊 1930年代満州、朝鮮人で構成された親日討伐部隊』

(西海文集、2013年)

김효순『간도특설대 1930년대 만주, 조선인으로 구성된 친일토벌부대』(서해문집, 2013년)

朝鮮人の青年達が日本軍から受け取った武器を持ち、朝鮮独立軍に向けて銃を放つ。そんな予想だにしない場面が、1930～1940年代の満洲の荒野で実際に起きていた。

本書は、朝鮮人の抗日武装勢力を根絶・殲滅するため、1938年に満洲国の関東軍傘下に作られた「間島特設隊」について、その歴史・社会的意義を多面的かつ包括的に分析した書籍である。

帝国日本軍の特殊部隊、間島特設隊の活動記録には簡単に触れる事はできない。1938年から日本が敗戦を迎える1945年まで7年もの活動期間がありながら、中国の抗日団体や、朝鮮の独立運動家を特別に殲滅する任務を遂行していた同部隊は、親日歴史清算に積極的ではない韓国では公論化されたことのない組織であり、一般人にはこうした概略の事実さえほとんど知られず、学界内の研究も非常に少ない。ジャーナリスト出身の著者は1年余の期間、中国の間島地方・吉林省・延邊朝鮮族自治州等を行き来しながら、間島特設隊に関する史跡と談話を収載してそのベールを剥がし、部隊の実体を追跡した。

1931年に満洲を占領した日本軍は、同地で中国人・朝鮮人との抗日ゲリラ戦に巻き込まれ苦戦していた。日本軍は中国本土の侵略に手一杯で、満洲人が主軸の満洲国軍は戦闘意志が薄く、軍紀も乱れていた。そのため、朝鮮人で構成された別の部隊「間島特設隊」を作ることにしたのである。1938年12月14日、第1期志願兵の入隊式が行われ、以降、1945年までの7期に渡り毎年約690名が選抜された。下士官を含む兵士は全員朝鮮人で、将校の一部のみ日本人であった。彼らは東満洲地域を中心に、1939年から40年までの間の戦闘で多くの戦果を挙げ、抗日連合軍をほぼ壊滅したが、間島特設隊はその優れた情報収集能力で高い評価を受けたといわれる。

日本に忠誠を誓った彼らは解放後、過去を隠して新生大韓民国軍へ入隊した。朝鮮半島の分断と米軍の占領、冷戦と共に巻き起こった「反共主義」の嵐の中で、同部隊を経験した多くの朝鮮人将校は、大統領を始め国務総理・国会議長・国防長官・軍司令官といった韓国政府の要職に就き、徹底的に粛清された中国の親日派とは裏腹に、親日清算の審判から逃れる事となった。さらに、満洲で彼らの討伐対象であった抗日勢力の多くが北朝鮮へ逃れた事も、彼らには免罪符として作用したのである。

その中で最も著名な人物が、陸軍参謀総長に就任した白善燁将軍である。彼は間島特設隊での服務の事実を、国民に真摯に説明し謝罪した事はない。しかし、「親日反民族行為真相糾明委員会」が発行した調査報告書によると、彼は1943年2月から間島特設隊で将校として勤務し、抗日武装勢力を弾圧する役割を果たした。そして、日本の敗戦直前まで侵略戦争に積極的に協力し、「日帝強占下反民族行為の真相究明に関する特別法」により「親日反民族行為者」に定められている。

民族歴史研究所が発行した『親日人名事典』には、日本軍に服務した少佐以上の軍人が記載されているが、間島特設隊については「独立軍抹殺」という悪辣な任務を鑑み、将校はもちろん、所属兵士全員

が登載された。中国が調査した抗日烈士（中国で公認した「抗日烈士」）3,125 人の内、朝鮮人が 98% を占めていた点から見ても、彼ら抗日抵抗勢力の討伐が目的の間島特設隊の任務は、日本の以夷制夷戦略の産物であるという事実からは免れられない。

では、なぜ彼らの存在は今日までスポットライトを浴びなかったのか。資料が不足している上中国と日本に分散している点等の理由もあるが、何より大きな原因は、韓国社会が親日派の清算問題を適切に消化する事が出来なかった点である。著者は 1980 年代に、「間島特設隊は民族の誇りであるという親日派の主張が繰り返され、抗日運動の反対側にいた人間が過去を美化する事を認めてはいけない」と語り、反共主義が蔓延する韓国社会では、部隊が「共産主義の中国の抗日団体を討伐した」という部分ばかりが誇張され、適切な議論がなされていないと述べている。

実際、その後韓国が辿った歴史の矛盾点には胸が痛む。満洲軍で活動した朴正熙が、植民地解放後に「光復軍の精神がりりしく満ち溢れる」という内容の詞を読んだ事は笑止千万であり、抗日運動を行った多くの人々が共産主義者と見なされたり、特殊反国家行為と断罪され死刑宣告を受ける等、もどかしい歴史のアイロニーには事欠かない。

著者は「間島特設隊」を巡る真相に対して、「抗日武装団体」と「親日討伐部隊」の対立構図から抜け出し、独立運動の聖地であった間島で部隊が誕生した過程と、活動内容を探ると同時に、事実に対して安直な評価を慎み、極力客観的に当時の満洲で起きた事象を伝えようと努力した。本書は、日本の植民地支配によって生み出された間島特設隊問題を徹底的に追究し、植民地時代の考査のあり方について鋭く問いただす一冊である。

